

世界と議会

World
and
Parliament

一般財団法人
尾崎行雄記念財団
www.ozakiyukio.jp

2019 夏号
OZAKI
YUKIO

特集：日本の進むべき道

峯堂塾設立二〇周年・峯堂没後六五周年

記念講演「日本の進むべき道」／石破 茂

特別論文

自由民権政治家・西潟為蔵の生涯—政治家の矜持／弥久保 宏

歴史資料から見た尾崎行雄

第一回「尾崎行雄とうなぎの蒲焼」／高島 笙

INPS JAPAN

アフリカ— 鉱物資源の収奪と環境破壊に苦しむ地元住民

連載「尾崎行雄伝」

第十三章 文相の舌禍



『世界と議会』

(夏号) 目次

峯堂言行録 (2)

特集：日本の進むべき道

峯堂塾設立二〇周年・峯堂没後六五周年

記念講演「日本の進むべき道」..... 石破 茂 (4)
(衆議院議員)

特別論文

自由民権政治家・西潟為蔵の生涯

—政治家の矜持 弥久保 宏 (20)
(駒沢女子大学人文学部教授)

歴史資料から見た尾崎行雄

第一回「尾崎行雄とうなぎの蒲焼」..... 高島 笙 (30)
(東北大学大学院文学研究科)

連載『尾崎行雄伝』 第十三章 文相の舌禍 (34)

INPS JAPAN

アフリカ— 鉱物資源の収奪と環境破壊に苦しむ地元住民 (48)

財団だより (50)

『民主政治読本』——この本を書く私のころ

日本の民主化とか、平和国家の建設とかいえば、何か耳新しく聞こえるが、突き詰めれば、それは日本を立派な立憲政治の国に仕上げることを意味する。そして、そのためにはもっと真剣な政治教育運動を全国に巻き起こさなければならないが、残念ながら、それに都合のよいテキストがない。

私の経歴は、そうしたテキストを書くのに最もふさわしいものと、人も許し、いささか自ら思うところもあって、すすめられるままに、この本を書く気になった。

私はこの本を、一人でも多くの人に読んでもらいたいと思うが、とりわけ十五歳から二十五歳ぐらいまでの女の人、男の人に読んでもらいたいと思う。いつの時代でもそうだが、特に今の日本の運命は、この年齢

の人たちの、純真な政治的自覚と活動にかかっているからである。

政治教育運動は、もちろん、政党の党勢拡張運動とは違う。また、必ずしも立派な肩書きのある学者先生が、政治問題をひっさげて全国を講演して回ることもない。

もしこの本を読んで、なるほどと納得し、「われは奴隷にあらず、各種の基本的人権を所有する自主人である」と自覚した人があったとしよう。その人が、手近なもう一人の自覚を促し、その人がさらに他の一人に宣伝すると、あたかも池に投げ込まれた一石がまず一波を生じ、そこから千波・万波を生じるように、次から次へと広がっていく。そうなれば、全日本人の奴隷根性を一掃し、封建思想を克服して、平和日本再建

の大業を成就することも、必ずしも不可能ではないと思う。

私は、この本で、日本が負けたいきさつをはつきり書く。また、こうすれば日本は立派な民主国・平和国家として、必ず生き返ることができるという筋道を自信をもって書く。読者諸君の中、もし幸いに私の言うところに道理があり、それが正しい国家再建の方途であると認める方があれば、どうぞ次から次へこれを宣傳し、目前の利害得失をすてて、国家再建の正道を日常生活の上で実行してください。

『民主政治読本・復刻版』（二〇一三年）より



大正三年、司法大臣就任式翌日、テオドラ夫人とともに

悟らざる

民を諭すの

甲斐なきは

河原の石に

道説くごとし

大正九年

尾崎行雄

【罌堂塾設立二〇周年・罌堂没後六五周年記念講演】（二〇一九年四月二三日開催）

「日本の進むべき道」

石破 茂

（衆議院議員）



石破 茂（いしば・しげる）

一九五七年鳥取県生まれ。七九年、慶應義塾大学法学部卒業。八六年、衆議院議員初当選（以後連続当選、現在一一期目）。二〇〇二年、防衛庁長官。〇七年、防衛大臣。〇八年、農林水産大臣。〇九年、自由民主党政務調査会長。二〇一二年、党幹事長。一四年、地方創生・国家戦略特別区域担当大臣。著書に『国防』『日本を、取り戻す。憲法を、取り戻す。』『日本人のための「集団的自衛権」入門』『日本列島創生論―地方は国家の希望なり』『政策至上主義』などがある。

皆様、こんにちは。ご紹介頂きました自由民主党・衆議院議員の石破茂であります。

「政治というのは現実だ」とか、「政治は取引だ」とか、いろんなことが言われるわけですけれども、常に「政治はこうありたい、こうあるべきだ」というのを忘れないでやっていきたいと思っていて、昭和六一年七月七日の初当選から、気が付けば三三年ということになりました。

先ほどご紹介頂きました通り、これまで大臣も何回もやりましたし、党の役職もやりました。でも、どうもこれで終わるといっただい、いつか何のために政治家をやったのかなという感じがしております。もし有権者の許すところであれば、もうしばらく議員というのを続けていきたいと思っております。

尾崎先生が「人生の本舞台は常に将来に在り」ということを仰っています。皆様もよくご存じかと思いますが、これは尾崎先生の言葉の中でも特に有名な言葉であります。

七〇歳を過ぎられて盟友の犬養毅を五・一五事件で失い、奥様も亡くなられ、ご自身も病気で失意の底にあった尾崎罌堂が、天啓のようにひらめいた言葉―そ

れが「人生の本舞台は常に将来に在り」ということだそうであります。

なるほど、その通りだなと思う。今は得意満面であっても、あるいは失意の底にあったとしても、今は本舞台ではない、必ず人生の本舞台は常に将来に在るものだ。今がどんなに得意満面であつたとしても、決してそれが長続きをするものでもないし、たとえ失意の底にあつてもうだめだなど思っても、それは自分を鍛えるための有り難い機会であることなのだ、浅薄な理解かもしれませんが私はそのように考えているところであります。

◆総裁選を振り返って

昨年の九月に、自民党総裁選挙というのがございまして、私と安倍総裁が争って、安倍さんが議員票の圧倒的多数をとって、あるいは党員票の五五％をとって再選を果たされたというのは皆様もご承知の通りであります。

現職の総理大臣と一対一でやったというのは、なんと四八年ぶりなんだそうです。

一九七〇年、昭和四五年の大阪万博があった年、時の総理は佐藤栄作先生でありました。まだ当時アメリカの統治下に沖縄はありましたので、沖縄返還は絶対に関与の手でやりたいということで、四選を目指すということを発表されました。

有力な対抗馬と言われておった前尾繁三郎先生が立候補を辞退されたそうで、もう佐藤さんは無投票かなという雰囲気であったそうです。

私は当時中学校二年生でしたもので、おぼろげながらにしか覚えておりませんが、その時に「これはおかしいではないか。無投票というのは絶対にあつてはならない。私は何ものをも恐れないが、ただ国民の心が自民党から離れていくことだけを恐れるのだ」と言つて、敢然と立候補したのが三木武夫さんという人でありました。田中角栄先生の後の総理大臣であります。小さな派閥のリーダーでした。

私は、主義信条はかなり三木先生とは違うのであります。随分と健闘して存在感を確たるものとしたと言われております。一対一でやったのはそれから四八年ぶりなのだそうです。

なんてったってもう一八歳から有権者ですから、あと三年たつたら有権者だという考えが絶対ないかといえはウソになります。(笑)、そうではなくて、せっかく地方から東京に来て国会というものを見て、みんなそりゃあデイズニードとかスカイツリーとか、そういうもののほうが楽しいに決まっています。だけど、せっかく国会というものに来たからには、何か覚えて帰ってもらいたいと思つていのです。なるべく秘書任せにせずに、私自身がお話するようにいたしております。

それで、子供たちに「この国会って何をするとおだと思ふ？」って聞くと、「うーん」とか言つて、「政治をすることです。」—そりゃそうだ。

ここはね、何をするとおるかというかね、一つは、総理大臣の選挙をするところなんだよね。町長さんは町民が選ぶ、県知事さんは県民が選ぶ、だけど総理大臣を選べるのは衆議院議員四六五人と参議院議員二四二人だけなんだよね。

二番目はね、世の中にはいろんな決まりがあつてね、道路は人が右側で自動車は左側とかね。消費税は

お利口さんだつたらあんなものは出ないほうがいいと思います。なかなかどう考えても、党員票はともかく、全部の派閥が安倍さん支持でありましたから、これはまあ普通に考えればなかなか勝ち目はないよねということだと思つています。

市長というのは市民が選ぶわけですよ。知事というのは県民が選ぶわけですよ。じゃあ内閣総理大臣は国民が選ぶのかというと、そうではない。いずれにしても市長や知事は有権者が選ぶけど、しかし総理を選べるのは衆議院議員四六五人、参議院議員二四二人だけなわけですね。

◆国会とは何か—地元の子供たちへ

ゴールデンウィークあたりになると、私のところには国会見学というのがあります。

私の選挙区は鳥取県ですが、中学校三年生になつたばかりの子供たちが、国会見学にやってきました。私はできるだけ都合がつく限り、自分自身で絶対にお話をするを初当選以来やっております。

八%とか、あるいは煙草も酒も二〇歳にならなきゃ吸つても飲んでいいかとか、そういう風には世の中にはいろんな決まりがある。それを法律というのだよ。それを作るのがこの国会の仕事なんだよね。

三番目は、国はいろんなお金を使うよね。例えば医療費つてのは四二兆円するんだよね。私は防衛庁長官や防衛大臣をやっていたが、戦車つて一両一〇億円するんだよね。戦闘機つて一機一〇〇億円するんだよね。イージス艦つて一隻一三〇〇億円くらいするんだよね。農林水産省の予算つて五兆円なんだよね。

国はいろんな仕事をする。そのために国民から税金を頂いて、あるいは国民から借金をし、そうやってお金を集めそれをどうやって使おうかな、防衛にこれくらい、農業にこれくらい、教育にこれくらい、年金にこれくらい、こういうふうに使いたいですという案も政府が作るんだよね。それをいいか悪いか判断するのが国会の仕事なんだよね。

四番目は、日本の国はいろんな国と、いろんなお約束をするよね。例えば日本とアメリカ。日本が攻められたらアメリカは守ると、その代わり日本は日本の防

衛のため、そして極東の平和と安定のため——というのはアメリカ合衆国の利益のためといってもそんなに間違いないと思います。アメリカは日本を守り、日本はアメリカに基地を貸すと、これを日米安全保障条約というんだよね。そういうのは、安倍さんとトランプさんが勝手に決めるわけにはいかない。中国とはどうやって仲良くしていこうかとか、あるいはロシアとはどんな取り決めでやっていくかというのも、安倍さんとプーチンさんで勝手に決めるわけにはいかん。つまり、国と国との約束をしてもいいかどうか、その判断をするのが国会の仕事だよ。これを、条約の批准といいます。

だから、国会の仕事というのは、総理大臣を決め、国の決まりを決め、お金の使い道を決め、そして外国と約束していかどうかを決める。

そして、もう一つあるよね。君たち、最近、憲法改正という言葉を聞いたことないかい？ 憲法というのはあらゆる法律の頂点にある。あらゆる法律は憲法に適合するように作られなければならない。日本の最高法規である日本国憲法、これを改正してもいいかどうか、それを

選挙の時だけは、自分が国会議員だったらどうするか、自分が総理大臣だったらどうするか、それを考えて一票を入れないと、それは国民主権にはならないだよ。ねと言っていると、どうもこの辺からわからなくなってくる（苦笑）。

◆父・石破二郎が薦めた本

私は国民主権って何なんだろうねということを本当に思うんですね。

私は田中美知太郎という人がとても好きで、私の父親が田中美知太郎を信奉しております、もともと内務官僚でありま

す。内務省に入省して地方をいくつか回って、太平洋戦争になって、陸軍司法官をやっております。内務省



国民に提案するのが国会の五番目の仕事だよ。

憲法改正の発議っていうんですね。これはとっても大事な決まりなんで、憲法というのは、衆議院・参議院が勝手に決めるわけにはいかん。衆議院総議員の三分の二、参議院総議員の三分の二で、はじめて憲法の項を改正しようねという案を作って、そして国民に対してこれでいいですかと提案をする。憲法改正の発議——これが国会の仕事なのだ。

さて、それで、この国会の持ち主は誰なんだろう。おじさんは国会議員だけど国会議員は国家の持ち主ではない。総理大臣も持ち主ではない。皆さん一人一人がこの国会の持ち主なんだよ。これを主権在民という。日本国憲法の最も大事な精神なんだよ。これ必ずテストに出るから覚えて帰ってねと言っていると、「わーい」とか言って（笑）。

だから、投票日が来ると、誰かに言われた人に一票を入れるとか、投票に行かないとかもつてのほか。選挙になって行かない、あるいは誰でもいいや、あるいはこの人に入れてねと言われたから入れる。これ全部おかしいでしょ。

から陸軍に行って占領地行政をやるわけですね。スマトラにもおりました。そして、戦争が終わって帰ってきて、内務省に戻って警察予備隊の創設にかなり深く関わっておったのがうちの父親であります。石破二郎と申します。亡くなって四〇年近くにもなります。

私、防衛庁副長官の時に、担当審議官に言ったことがある。「そもそもだ、今の自衛隊法そのものが間違っている。これは警察の法律であって軍隊の法律ではない。国家を守るのが軍隊、国の独立を守るのが軍隊。国民の生命・財産、公の秩序を守るのが警察だ」と。

警察や軍隊を「暴力装置」と言ったのはマックスウェーバーであります。私は、仙谷さんが官房長官の時、「自衛隊という暴力装置」と言って大騒ぎになったことがあります。私はこの人はちゃんとマックスウェーバーを読んだらと思って、心ひそかに感心をしたことがあります。

つまり国家とは何かというと、警察と軍隊という暴力装置を合法的に独占する主体のこと。こういう定義ですよ。日本人はこれを聞くと嫌な顔をするんですけど、意外とこれが事の本質かと私は思っているの

です。

いずれにしても、自衛隊法の書き方というのは警察法がベースですから、その大もとは警察予備隊令などで、大体これが間違っていると、防衛庁副長官の時に言ったのです。すると、担当審議官が、「副長官はさっきからこの自衛隊法のことをめっちゃくちゃに仰っておられますが、この法律をお書きになったのはご尊父様であるということをご存じですか。それとも知らないで仰っているんですか」と。読売新聞から出ている『再軍備の軌跡』という本に、確かにそう書いてある。



因果は廻ったりしているのですが、とにかく、その警察予備隊の発足にかかわり、発足の日の某新聞には、「警察予備隊今日発足、初代警備局長石破二郎氏」と新聞辞令が出ています。うちの父親はなぜかその道に入り、ほんな

す。その本の中に、国民主権とは何かを論じた箇所があるんですね。日本は国民主権、国民主権というけれど、国民主権だとは私は思わないというかなり挑戦的なお話なのであります。

市民革命の前というのは、王様が勝手に戦争を始めて、王様が勝手に戦争をやめるわけですよ。王様が勝手に税金を集めて、勝手に使うわけですよ。王様も「国民」という概念がないわけですから、

ネイション・ステートではないので、お願いする立場という立場だったに過ぎない。「臣民」

しかし、市民革命後は、国家は国民のものである、戦争を始めるのもやめるのも、税金をどのように集め、それをどのように使うかも、国民が決めるのである。ただ毎回毎回、国民投票をやるわけにもいかないので、議会とか大統領とか総理とか、そういうものを作って代わりにやらせる。

しかし、その者たちを選ぶときには、自分も議員になりせば、自分も大統領なりせばどうするのだということを考えて一票を入れなければ、それは主

く建設省に転じて、そのあと事務次官、鳥取県知事、参議院議員、自治大臣と務めました。そういうような家に育っているのですけれども、その父親が田中美知太郎先生をすごく好きだった。田中美知太郎全集なんてよく読んでいた。

父親はあれこれ言う人ではありませんでした。まあほとんど家にいませんでしたしね。ただ一つだけ言っていたのは、人に迷惑だけはかけるなということ。これだけは徹底的に叩き込まれました。その割には欠けるなつて気もしますが（苦笑）。

あれこれ教えてくれる父親じゃなかったんですけれど、この本を読み、面白いぞという本を、小学生・中学生である私に渡してくれることは多かったです。

◆民主主義とは何か

その中の一冊に、これは私が大学生になってからでしたが、田中美知太郎先生の論説集で『市民と国家』という本があります。今でもアマゾンで手に入るかもしれません。

この『市民と国家』というのは実に良い本であります。

権者の名に値しない。

税金はまけてね、社会保障はいっぱいやってね、公共事業はガンガンやってね、そんなことやっていたら国はつぶれる。自分が為政者なりせばどうするかと考えて一票入れられるのが、国民主権にいうところの主権者なのである。好き勝手なことばかり言っているのは、これは昔の臣民に過ぎないのであると、田中美知太郎先生は論じておられる。

私は、これにかなり衝撃を受けました。最近、「主権者教育」という言葉が流行ってますけれども、民主主義ってというのは参加する資格を持った人のなるべく多くが、可能ならば全員が参加をする。そして主権者に対して、有権者に対して、正確な情報が伝達されない民主主義ってのは機能しない。

まさしくウィンストン・チャーチルが言ったように「民主主義は最悪の政治制度である。今まで存在したあらゆる政治制度をのぞけば」——非常にチャーチルらしいことを言っておられるわけですがね。

あれこれ考えても、そりゃ時間はかかるわ、金はかかるわ、手間はかかるわ、ベストの結論が出たためし

はないわ、民主主義というのはそんな欠陥をいっぱい持っている。いっぱい持っているけれど今まで存在したあらゆる政治制度よりはましなものだということ。

私もそうだと思います。ただ、民主主義が機能するためににはなるべく多くの人が参加し、そしてそこに参加する人達に正確な情報が伝達されていなければ、民主主義というのは形骸化し、やがてなくなっていく。だからワイマール憲法下で、なんでナチスドイツができたかというところ、そういうことだと思っております。

気を付けなければなりません。民主主義というのはそういうことであって、これが投票率がどんどん下がる、立候補者が少ない、これはかなりまずいと思わなければなりません。無投票っていっぱいあります。

最近では知事の無投票というのが登場するようになりまして、市町村長の無投票はもはや当たり前になりました。私もしたですね、議会は定数割れみたいな話であります。

投票率もガンガンと下がりました、去年の一月、私の鳥取市で市議会議員選挙があったんですけどね、投票率がとうとう四〇%ですれすれ、一〇人のうち六人が投票に行かない。なんでこんなことが起こるんだといえば、それは議員なんて誰がなったって一緒だよって声がいかに多いかということでもあります。

だけど基本、衆議院は小選挙区ですからね、自民党はいかがなものか、最近ちょっとおかしいんじゃないかと思う人がいたとしても、かといってあの野党に入れる気にはならんよね。

そうすると自民党にも入れたくない、しかし野党にもっと入れたくない、すると畢竟答えは棄権ということにならざるを得ない。こういう人は意外と多いのではないかと思っておりますが、これを民主主義の危機と言わずしてなんと言うか。

◆日本の置かれている現状

投票率は下がり、政治に参加しない、情報は片寄る、そういうところにいるうちにこの国はどうなったかというところ、今一億二七〇〇万人といわれていますが、今年で四五万人ずつ人口が減っております。

こんなの序の口で、これから一年で一〇〇万人ずつ人口が減る時代に入ります。一億二七〇〇万の我が国は西暦二一〇〇年に五二〇〇万人に必ずなります。

よ、そういうところがあるのかもしれない。

政治家は誰がなったって一緒ってことはないと思いますけど。誰がやっても一緒だ、もしくはあまりに割に合わない。私は、もともと政治家になる気はなかったんです。親を見ていてそんなにいい仕事だと思わなかった。そんなに儲かるわけでもないし、プライベートな時間なんてまずないです。それに、私は親と一緒に遊んだ記憶がほとんどない。

昔みたいに人口はどんどん増えるわけでもない、伸びるわ、つまり政治が配分する側だったときは、それでもまだ政治家って楽しかったかもしれない。正の配分だったときはね。だけど今はどっちかっていうと負担の配分ですからね。

これは我慢してください、こういうご負担をお願いします。やっぱりなる人が減ったというのはそういうことなのかと思っておりますし、投票に行っても大して何も変わらないとなると投票に行く意欲がわかない、そういうことじゃないんですか。

私は自民党ですけど、全て無謬だとは思っていない。統一地方選挙で全国を回り、そこで感じたのは、支持率の高さとは違って、「最近の自民党どうしたの

二〇〇年たつと一三九一万人に必ずなります。三〇〇年たつと四二二万人に必ずなる。今のままでいけば必ずそうなる。人口推計というのは外れたためしがない。

日本の人口が五〇〇〇万人を超えたのが明治の終わりでございまして、まあそのころに戻ればいいという人が時々おられますが、それは大いなる誤りで、明治の終わりの五〇〇〇万人というのは、若い人がいっぱいいて、年齢が上がるほどだんだん人が少なくなつて、正三角形の五〇〇〇万人ですからね。これからの五〇〇〇万人は、ほとんどその逆ですから。若い人が少なくて、年齢が上がるほど多くなる。

どうやって介護を維持し、いかにして医療を維持し、マクロ経済スライドを入れておりますから破綻することはありませんが、いかにして年金を維持していくかということを考えてだけで、それはまずサステナブル（持続可能）ではないと思わざるを得ないです。

恐ろしい勢いで人口が減る。人口が減る理由は多々あれど、まず結婚する人が恐ろしく減った。冒頭申し上げた昭和四五年、一九七〇年大阪で万博があった年、男性も女性も生涯未婚率って二%でしたからね。

アンダークラスという言葉がありますが、年収一八六万円以下の人がこの国に大体一三〇〇万人くらいいるのですね。年収一八六万で東京で結婚してお家を借りてというのは、結構難しくないでしょうかね。

つまりグローバル経済というのは、国と国の格差は縮まるんですけれども、賃金は外国の賃金、安い国の労働者に合わせるもんですから、国内の格差は広がるんですよね。グローバル経済ってそういうものでしてね。

私は格差って言葉をあまり使うのは好きじゃないんだけれども、格差は歴然としてあって、それが固定化しつつあってですね、そうすると結婚しようと思ってもなかなかできないっていう若い層は結構おられるのだと思います。

高齢者の貧困も大問題です。昭和四〇年代から五〇年代にかけて地方が元気だった一〇年間ってありました。私が生まれた鳥取県でも人口が増えました。私は鳥取市の育ちですが、駅が高架になって、ニューオータニが来て、大丸ができて、夢はないかと思いましたがね。

シャッター通りなんてなかったしね。農山漁村も活気があった。休みになると観光バスがわんさかと来て

だけどそういうビジネスモデルと同じ物を安くたくさん大勢の人へというのは、やがて中国の得意分野になって、それがつい最近まで続いていたんですね。中国のGDPに占める輸出の割合って二〇〇八年は確か三五%だったはずですよ。直近は一八%に落ちていますが、これはAI化・ロボット化というのが中国の輸出産業を奪ってしまったところがある。

米中貿易競争の本質もそういうところにありましてね、中国はこれから内需型に変えていかないと、アメリカとのトラブルはずっと続くし、国内も持たないと私は思っているのですけれどもね。

とにかく、同じものを安くたくさん大勢の人へというやり方は、もはや日本には向いていないということなんですね。

◆付加価値が地方創生の鍵

これからの日本は、「少量・多品種・高付加価値」、そういうビジネスをやっていくかなきゃいけません。

もちろん公共事業もやるし企業誘致もやるが、かつ

ね、そりゃ鳥取であろうが山形であろうが、鹿児島だろうが青森だろうがどこでもそうですよ。地方が元気があった一〇年間ってこの国には確かにあった。

あれを「もう一回やってくれ！」って、できません、それは。同じことはできない。

あの頃の地方は、どんな道路がよくなり、空港ができ、港ができ、農村基盤が整備され、公共事業で多くの雇用と所得があったんですよ。もちろん我々は自民党なので、コンクリートから人へなんて言うつもりはありません。必要な公共事業はやりませぬ、防災もやりませぬ、昭和四〇年代・五〇年代といった右肩上がりの時代と同じことはできませんと申し上げているのであります。

あの頃は、同じ物を安く、たくさん、大勢の人に作るというビジネスが日本国中に展開をしておりました。昭和三〇年代、日本人は何が欲しかったか。白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機：映画『ALWAYS三丁目の夕日』の世界ですよ。そして四〇年代になると、カラーテレビとクーラーと自動車。同じ物を安くたくさん大勢の人へということで、日本中に雇用と所得があった。

てと同じ手法で地方に賑わいは取り戻せない。昔みたいに、鳥取の三洋電気に従業員三〇〇〇人なんて、そんな話にはならんのですよ。

地方において、かつてのような雇用と所得は取り戻せないという中、実は日本ほど農業・漁業・林業に向いた国は世界にないわけでありませぬ。だって農業は土と水と光と温度の産業で、この四条件を全部満たしているって日本くらいのもんですよ。

日本人が魚を捕れる面積は世界で第六位。海水の体積でいえば世界第四位。なのに、なぜ日本の漁業は衰退産業なのか、なんかおかしくないですか。この国の七割は森林なのに、なんで外国から木を買ってきたほうが安いのかという話になるわけですよ。

それは今までの農業政策、漁業政策、林業政策が、いかに公共事業を持ってくるか、いかにして誘致企業に人を送るかということばかり考えてきた。生産性を上げるとか、付加価値を高めるといふ概念がほとんどなかったわけですよ。逆にいえば、そこにもものすごいポテンシャルがあるという話でございます。

インバウンド（訪日外国人観光客による消費）もそ

うなんですけれど、結局観光って何なのかっていうこととです。「今だけ、ここだけ、あなただけ」という付加価値。そして日本は春夏秋冬の四季がはつきりしている。自然が豊かで美しく、歴史・伝統・文化・芸術が深く、酒と食べ物おいしい、この四つが決め手になるんだそうです。

一七―四市町村が日本にはあって、私もまだ四二〇―四三〇しか行ってないですけどね。おたくの町の歴史伝統文化芸術を知っていますかと聞くと、知らないと言う人がいっぱいいます。子供たちは受験勉強に忙しくて、自分の町の歴史とか自分の町の自然とか、そんなもの受験に全く役に立たないですから、教えられていないし、学んでいない。

だけど、その地域に伝わるお話、特徴的な歴史が日本中にたくさんあるんですね。日本書紀由来のいろいろなお話、古事記由来のお話、それぞれの地域にもものすごくいっぱいありますよ。そして、酒と食べ物、これがまたすごいです。

観光というのは、そうした独自のもの―「今だけ、ここだけ、あなただけ」ってものを、どれだけ磨くかということなんです。

医療にしても介護にしても年金にしてもそうです。このままいったら、あと二〇年で介護にかかるお金は二・四倍、医療は一・七倍になるわけです。一年以内にあの世に旅立たれる方、その亡くなる前の二カ月に莫大な医療費が投入されるわけです。ね。

私は、自分の父親がそうだったのでよく知っているのですが、すい臓がんの末期でしたけれども、とにかくすごい医療が行われる。本人も苦しい、医師も看護師も大変、家族も大変、だけでも一分でも一秒でも長く生かすことが医学の勝利だということになっておりますんでね。だけど、次の時代を生み育てる子供たちに、じゃあそこにどれだけ使われているかということと、今こそ聞うていかないと、社会はサステナブルなものにできないのではないですか。

医療・年金・介護あるいは経済の在り方、いつまでもゼロ金利でやっていけるか、それを批判するのは簡単です。じゃあどうするんだという解を示さないと無責任の極みだと思っております。

JR九州の「クルーズトレイン・ななつ星in九州」というのがあります。これに乗って、ずうっと各所を巡り、最後に博多駅に帰ってきたとき、乗車していたご夫婦が本当に泣くんですね。「こんなに素敵な時間があった。こんなにおいしいものがあった。こんなに素敵な人がいた」と。そういうものではないんでしょうか。

付加価値っていうのは、要は「これだけのお金を出しても、この商品、このサービス、このひととき」を買いたい。そういうふうには消費者が思えることなんです。じゃあ、そんなことが、霞が関や永田町でわかるとは思いますか？ 付加価値って結局は民間が作り出していくもので、それをやりやすい、生み出しやすい環境を整えることを政治はやっていかなきゃいけません。

だけど、金利がゼロっていうのは本当にお金回っていくことにおいて常にプラスですか。それって滞留すべきところでないところにお金が滞留している。回らなきゃいけないところにお金が回らないということを生みませんか。今の状況を脱して、いかにして新しい経済に踏み出していくかっていうことを、今やらないうでどうする。

◆安全保障について

あと数分、安全保障のお話をいたします。安全保障はえらいことになりますからね。

つまり、冷戦時代ってのは、本当は戦のないバランスオブパワーで、本当に幸せな時代。けども、戦のネタってのはどこにもある。領土、宗教、民族、政治体制、経済間格差、この五つが戦のネタであって昔も今も変わることはないと私は思います。

その時に、ユニテッドネイションズ（国連）を、あたかもインターナショナルガバメント、世界政府のように思っていると思わず間違える。あれは第二次世界大戦に勝った国の集まりですからね。中国は「国際連合」なんて絶対に訳しませんからね。「連合国」って訳しますからね。それが本質ですよ。

日米同盟って、いったい何なのだと考えたときに、これは「非対称的双務関係」ですからね。つまり果たす義務が違うという世界でたった一つの同盟です。合衆国は日本防衛の義務を負い、日本は基地提供の義務を負う。



かみたいたいののは、もつてのほかだと私は思います。この程度の国民にこの程度の政治家って言葉が私は一番嫌いで、皆様方もそうかも知れませんが、有権者が政治家を信じていますか？政治家を信じてるっていう人を新橋の駅前前で聞いてみて一〇〇人に五人いたら大変なことです。おそらくそれは政党の関係者ではないかと思えます（笑）。
あ政治家は国民

フランス第一八代大統領シャルル・ド・ゴールは、「同盟というのとはともに戦うことがあっても、決して運命はともにしないものだ」ということ言った。また、一九世紀の英国首相パーマストンは「英国にとって永遠の同盟もなければ永遠の敵もない。あるのは永遠の英国の国益のみ」ということを言っています。そして北方領土については、ソ連が無法に占拠した我が国固有の領土だということを動かしたら、国が国でなくなりますからね。そこをいい加減にしたなら主権国家というのは成り立たなくなる。主権国家ってのは、領土・国民・統治機構、この三つを絶対的に外国に手を触れさせないこと。これが主権国家なのであって、そこを揺るがすと国家そのものが崩れる。国民の権利や自由を守ってくれるのは、それは国家なんです。ほかの誰も守ってはくれません。国家と市民という対立概念で考えるからいけないのであって、市民を守る国家かどうかということは、国民が決めることなんです。そして最後に、憲法九条の改正について、私は安倍さんと立場が違います。必要最小限度だから戦力では

ない、戦力ではないから陸海空軍ではない、これを聞いてわかる人がどれだけいるんだ。

前項の目的を達するため、陸海空その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権はこれを認めない。これが九条二項ですよ。じゃあステルス戦闘機のF35を持つてますよ、護衛艦いずもを持つてますよ、一〇式（ひとまる式）戦車を持つてますよ、世界最新鋭の装備を持つて我が自衛隊は、なんで陸軍でなく海軍でなく空軍でないのか。これは私も何度も国会答弁しています。「戦力ではない」からです。なんで戦力ではないのか？「必要最小限度だから」です。以上。なんだそれは？じゃあ戦闘機を二〇〇機持ったなら必要最小限で、二五〇機だったらそれを超えるのですか。北朝鮮に対して必要最小限度のものが、ロシアに対して必要最小限度だとは、私は思わないですね。

国家の独立を守るのが軍隊です。国民の生命・財産、公の秩序を守るのが警察です。そこをあやふやにしたままで、これからの時代に立ち向かっていけるとは私は思わない。

だけど、この憲法の改正とはいったい何なんだって話を正面から国民にしないで、まあこの辺で手を打つて信じているんですか。これ言ったってどうせわかんないよ、これ言ったって嫌われるよ、これを言ったら票が減るからねと言って、本当のことを言わない政治家は、国民を信じていないんじゃないですか。国民を信じていない政治家が国民から信じてもらおうなんて思わないほうがいいと私は思っております。

出来るか出来ないかはわかりません。ですけど、日本国民の英知っていうのは、政治が真摯に語れば必ず応えてくれる。少なくともわかってもらう努力は誠心誠意、最大限やるのが、我々政治の務めなのであります。

これから先、人口は減る、経済はそんなに伸びない、主権国家同士の争いは必ず起こる、それにテロが加わる。私たち日本民族が経験したことのない時代に、政治が今のままであっていいはずがない。そう深く思う昨今でございます。

有り難うございました。

（了）

自由民権政治家・西潟為蔵の生涯―政治家の矜持

弥久保 宏

(駒沢女子大学人文学部教授)

はじめに

明治二三年、わが国にアジアで最初の国会である帝国議会が設置され、その記念すべき第一回衆議院議員選挙で三〇〇名の議員が選出された。その中には、憲政の神様、尾崎行雄をはじめ中江兆民、植木枝盛、犬養毅といった日本憲政史に名を連ねる面々と共に、新潟県第四区選出の西潟為蔵がいた。

西潟は第一回帝国議会から代議士を二期、新潟県会議員を五期務め、同時に地元郡町村会議員も兼任し続



西潟為蔵

け、その政治活動は地元地域に軸足を置きつつ、中央と地方の架け橋的な役割が中心であった。しかし、一旦、国家緊急の際は中央に出張り、時の内閣総理大臣伊藤博文に辞職勧告を突きつけ、他方では、山縣有朋内務大臣に地元道路開墾で国庫補助を迫る談判をするなど、薩長政府

に怯むことの無い在野の反骨政治家であった。

現在、西潟の知名度はその功績に比べて一般的に低いが、自由民権政治家としてのスケールは、同志だった板垣退助や後藤象二郎達に十分に伍する人物であったことは、彼の残した回顧録から窺い知ることが出来る。西潟が晩年に著した回顧録『雪花月』は、当時の自由民権運動や政党創成期の草の根レベルの活動を知る上で、第一級の資料となっており、研究者の間で西潟は、既に定評のある存在であった。

政治家西潟の姿勢は、常に立場の弱い民衆の側に立つ国利民福の理念で貫かれた。国や地方の行政から取り残された民衆に光を当て、必要とあらば私財を投じてでも地域社会に奉仕した「井戸堀政治家」としてその生涯を終えることになる。今日、政治と政治家の劣化が言われて久しく、当選だけを目的とし、志をもたない政治家の資質が問われることが多くなっている。本稿では西潟為蔵の政治活動を通じて、政治家の矜持とは何かを問うことにしたい。

一 生い立ちと自由民権運動への道程

(一) 生い立ち

西潟は、弘化二年(一八四五年)越後、村松藩蒲原郡下田郷福岡新田(現在の新潟県三条市)の地主の長男として生まれた。かつて西潟家は、信濃飯山城主も務めた堀家に仕える武士であったが、堀家が長岡に入封後、幕府によって堀氏家名断絶の際に武士を廃して蒲原郡下田郷に帰農し、以後その地域の地主として定住することになった。

西潟は、九歳になると当時の地主の子弟と同様に四書の素読や漢籍を学んだ。勉学に励む才気闊達な西潟は、すぐに村内で頭角をあらわし、一目置かれる存在となつてゆく。二一歳になった西潟は、初めて郷土の外へ見聞の旅に出る。約二カ月をかけての東山、東海、山陽、畿内、北陸を廻る旅は、西潟にとって幕末に押し寄せていた社会変革の波を体感した旅となった。この旅は、西潟に幕末封建社会の矛盾に対する洞察力を養い、後に藩の圧政に農民が蜂起する世直し一揆の指

導者へと続く起点となった。

(二) 地域の若き指導者として

明治元年、明治政府が誕生するも旧幕府勢力の一部は、新政府に抵抗を続けた。北越戦争で村松藩は、新政府軍に抗戦し敗北する。村松藩の財政事情は窮地に陥り、そのつけが農民への圧政となり、農民の不満は一気に爆発する。同年八月、村松藩領の下田郷鹿峠、長沢組三七ヶ村の民衆は、「暴政を改めよ、民情を察せよ」とついに蜂起し、社会変革を求める世直し一揆を起す。農民側は、藩に重税や暴政を改め、役人を公選することを求める「十ヶ条の請願書」を提示し、これを認めさせた。この請願書こそ、弱冠二三歳の西潟が起草したものだ。

藩の圧政に苦しんできた農民達の怒りと不満を集約し、反封建という立場に方向づけた西潟の手腕は、後の反藩閥政治や政党の創設などで活躍する自由民権活動の萌芽となった。こうした手腕が高く評価され、その後西潟は百姓惣代や鹿峠駅問屋役に選出され、地域

二 自由民権政治家としての活動

(一) 国会開設懇望協議会と自由民権活動

自由民権運動は、新潟県各地でも地租改正反対運動を唱える政治結社を中心に展開されてゆくことになる。とくに、明治一二年に開設された県会を舞台とした運動家等による政策論争は、自由民権運動の広がりに大きく貢献する。そして、千葉県の運動家、桜井静から各県議に送り付けられた国会開設運動への参加要請が浸透するにつれて、新潟新聞でも連日、運動家による国会開設の主張が紙面を賑わした。当時の新潟新聞主筆、尾崎行雄も「時期を失うべからず」の論文を掲載し、国会開設運動の好機としてその重要性を説いている。自由民権運動は、国会開設という大目標を得て、大きく盛り上がりつつゆくことになる。

明治一三年に入ると「国会開設懇望協議会」が結成され、国会開設運動は本格的な軌道に乗り、西潟も率先して運動に関わることになる。西潟は地元下田郷の有志総代として、賛同署名の獲得や募金集めで大きな

指導者として頭角を現してゆくことになる。

そして、明治政府による大改革の一つである地租改正事業では、農民の混乱と抵抗の中で地租改正掛として地元三ヶ村を担当し、政府と農民の間に立って難事業を見事にまとめ上げる。これにより、西潟の地域指導者としての人望と地位は確固たるものとなった。一方、西潟がこの地租改正事業に関わったことは、後の自由民権政治家への重要な起点となる。西潟は、地租改正事業を指導する過程で、農民の実情を無視し、権力を背景にした政府側の強引で画一的な政策実施に次第に不信感を持つようになっていた。同時期に新潟県下では、この地租改正反対運動を基盤にして幾つかの政治結社が組織され、自由民権運動が展開されつつあった。封建制の矛盾に抵抗し、常に農民や民衆の側に立ってきた西潟の反骨の眼差しは、新たに明治政府の圧制に向けられ、その受け皿として自由民権運動に加わってゆくことになる。

成果を上げ、これを契機に他の運動家からも一目置かれる指導者となり、国会開設懇望建白書の作成にも加わる。西潟は上京委員に選ばれ、元老院へ建白書を上奏するがそのまま放置され、太政官へ再度上奏するも結局失敗に終わった。この失敗は、西潟達に自由民権運動の裾野を広げる必要性を実感させ、その為の本格的な政治結社の組織化へと向かわせることになる。

(二) 政党的創設に参画

西潟は、国会開設懇望建白書の失敗を教訓に、同志等と全県に跨る本格的な政治結社である越佐共致会を結成する。越佐共致会は、県下自由民権運動の主要拠点の一つとなり、草の根レベルの活動範囲を広げる役割を果たす。明治一四年一〇月、中央から板垣退助と中島信行らの遊説一行を迎えた歓迎会の席上で、国会開設の大詔が発せられたとの知らせが入り、参列者一同は歓喜の雄叫びをあげる。越佐共致会を拠点とした自由民権運動が、ピークに達した瞬間であった。

一方、同年一〇月には東京で板垣退助、後藤象二郎



生家近くに立つ顕彰碑

等を中心に自由党が結成され、その影響を受け、県下各地域に自由党系組織が乱立する。西潟等は、これらの組織を統括する政党組織の必要性を感じ、翌明治一五年四月に越佐共致会を発展解党し、北辰自由党を結成する。

北辰自由党は党员三九〇名を越え、県下最大の政党となる。その活動で最も注目を浴びたのが、集会、言論、出版の自由を求める「三大自由の建白」である。この三大自由は、政党活動の根源であり、それ故政府当局によって強く制限が加えられていた。西潟は同志とともに、全国に先駆けて三大自由を懇願する建白書を元老院へ上奏し、北辰自由党の存在感を全国に轟かせた。

一方、政府による自由党系組織への弾圧は、日増しに強まり、最も急進的な活動を行っていた上越の頸城自由党が弾圧を受ける高田事件が起こり、逮捕者は北辰自由党関係者にも及んだ。これに政党資金難が追い討ちをかけ、県下の自由党系政党は、組織防衛の観点から中央の自由党と合同することになる。西潟は、新

太郎の小説「峠」では北越戦争で長岡藩家老、河井継之助が会津へ落ち延びる際に越えた道として紹介されている。鉄道が未発達な明治期において、八十里越は日本海側と太平洋側を繋ぐ重要な生活ルートの一つであった。

しかし、八十里越は県道でもなく里道に過ぎず、県は開鑿の為の測量調査にさえも予算を出さなかった。西潟は私財を投じて技師を雇い、自らも踏査に赴き、開鑿の為のルート選びと予算見積もりを概算する。そして、その調査結果を携えて上京し、山縣有朋内務大

たな自由党新潟第五部長の地位に就き、党の中核として自由党を支えることになる。西潟は明治一七年一月に大阪で開催された自由党全国大会に新潟県代表者として参加するが、皮肉にもこの大会での議案は自由党の解党であった。西潟は解党反対工作を行うが、議案は可決され自由党は解党となった。

西潟は自由党解党後も、憲政党や立憲政友会の中核幹部として政党活動を続けることになるが、こうした政党の離合集散を経て、越佐共致会の創設以来の同志の中には方向転換してゆく者も少なくなかった。しかし、政党人としての西潟は一貫して自由党を源流とする政党の本流を歩み、筋を貫くことになる。

(三) 私財を投じての道路開鑿と山縣有朋への談判

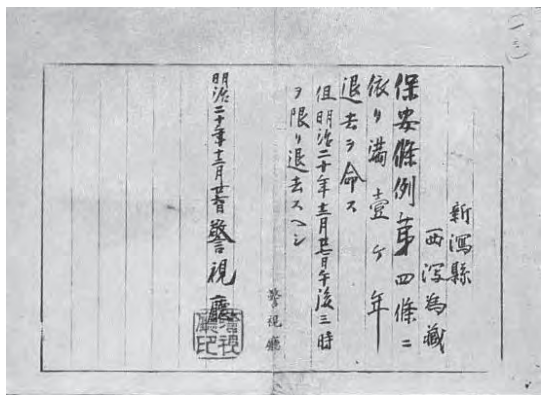
西潟の政治活動は地方だけでなく、国事にも奔走し全国規模に及んだが、とくに地元地域住民の生活の為に私財を投じて取り組んだ八十里越の道路開鑿は、今日でも地元で語り継がれ、その顕彰碑が建立されている。八十里越は、新潟県と福島県を繋ぐ道で、司馬遼

臣に国庫補助の談判を行った。内務省の内規では、国庫補助の対象は二県以上に跨る県道か国道のみで、里道は対象外であった。しかし、山縣は戊辰・北越戦争では官軍司令官として参戦しており、八十里越についての知見があったので、内規を曲げて了承し、三分の一の国庫補助を約束する。山縣は、私利を度外視した西潟の毅然たる態度に、その人物を見抜いたのである。その後、慌てた新潟県側は土木課長を通じて開鑿調査に私財を投じたので、その費用を県が支弁することを申し出る。西潟はその申し出に感謝するが「只、国民利福を増進せんと欲したのみ」と辞退する。西潟のこの政治理念は、その生涯の政治活動を通じて貫かれることになる。

三 在野政治家としての矜持

(一) 伊藤博文総理大臣に辞職勧告を突きつける

明治十九年、政府は井上馨外務大臣を中心に幕末に結んだ不平等条約の改正交渉に着手する。しかし、谷



保安条例の退去状

干城農商務大臣がその屈辱的な内容に抗議して辞職すると、改正内容は広く知れ渡り、全国各地で条約改正中止運動が起こった。新潟でも中止運動が盛り上がり、その中心に西潟がいた。西潟は条約中止の建白書を作成し、代表となって元老院へ提出する。

しかし明治二〇年一二月二五日、政府は突如保安条



伊藤博文への辞職勧告書

(二) 第一回帝国議会の代議士として

明治二三年七月の第一回衆議院選挙で西潟は新潟第四区から自由党系の候補者として当選する。しかし、それは自ら望んでの立候補ではなかった。当初、同志の大竹貫一が立候補の予定であったが、大竹が新潟県会で議長と刑事事件を起こした為に、火中の栗を拾う

例を公布し、一斉にこうした運動の弾圧に乗り出す。皇居周辺には軍隊が配備され、同条例第四条により、西潟等、条約改正中止運動家は即日、皇居から三里外へ撤去を命じられた。退去命令を受けた人数は五七〇名にも及び、その中には尾崎行雄もいた。しかし、弾圧は反対に自由民権運動の更なる結束を招くことになった。

政府の弾圧に憤慨した西潟は、個人の資格で明治二一年一月、伊藤博文総理大臣に辞職勧告書を送りつける。この西潟の行為は、全国の同志や条約中止運動を大いに盛り上げたという。これに対し、政府は更なる弾圧手段にでる。明治二一年四月、西潟は後藤象二郎と福島へ遊説に向かう途中、浦和駅で身柄を拘束され、警視庁に拘留される。出版条例違反の嫌疑だった。西潟は、鍛冶橋監獄に収監される。しかし、明治二二年二月二日に予審免訴となり、出獄した西潟は、同月二七日に実施された新潟県議会選挙に直ちに立候補し当選する。権力に怯まない不屈の闘志は健在だった。

形での立候補となり、投票日までわずか四日前のことであった。当時の立候補は、当局への届け出制ではなく、被選挙件資格(三〇歳以上男子、直接国税一五円以上)を満たしていれば、自薦、他薦を問わず候補者となることが出来た。

当選した西潟は東京の麹町隼人町に借家(その跡地は、現在は最高裁判所)を借り、東京での政治活動の拠点とした。西潟の日記によると、地元から東京までは、川汽船と鉄道を乗り継いで三日がかりの旅程であったことが記されている。代議士活動は、二期四年で終わるが、代議士時代に培われた人脈や知見は、その後の県会議員や兼任していた郡町村会議員としての活動でも活かされ、政党活動では県組織の幹部として党中央と地方支部を繋ぐ役割を担ってゆくことになる。

(三) 板垣退助内務大臣からの栃木県知事推挙を辞退

明治三十一年、板垣退助は内務大臣となり、自由民権運動や自由党の結成を通じて親交の深かった西潟を栃木知事に推挙する。しかし、西潟は「余は官吏たるを

好まず」と辞退し、代わりに同志の萩野左門を推薦する。維新時には、旧藩の圧政に農民と伴に立ち向かい、薩長藩閥の強権政治には、民衆の側に立って闘った在野政治家、西潟の面目躍如と言うべきであろう。西潟と板垣は、その政党活動を通じて時には対立をしつつも親交は終生続き、西潟家には今も板垣からの手紙が多く保管されている。西潟家には、この手紙の一部を雪隠紙に使ったというエピソードが残っている。

四 晩年―教育・福祉活動と回顧録の執筆

明治三八年、日露戦争が終結し講和条約が結ばれるが、日比谷焼き討ち事件に代表される条約反対運動が全国各地で起こった。還暦を迎えた西潟も、条約反対新潟県民大会の先頭に立っていた。その後、度重なる帝国議会への出馬要請も断り、それまでの政治的要職も退き、東京での政治活動の拠点であった隼人町の借家も引き払った。唯一、地元の村会議員だけが公職であった。西潟晩年の一〇年間は、主に教育と福祉活動

おわりに―「身命何にかあらん。財産吝しむに足らず」

西潟は大正一三年（一九二四年）に、井戸堀政治家として七九年の生涯を閉じる。西潟家の七町五反の田畑は人手に渡り、後に膨大な借金が残された。子孫は小作人から再出発し、その返済に二〇年を要したという。以後西潟家では「政治は一代限り」が家訓となった。

今、政治の世界は二世、三世議員花盛りで、「家業としての政治」が罷り通っている。西潟の生涯は、私利私欲を度外視し、ひたすら国事や地域社会の発展の為に寝食を忘れて奔走した一生であった。ならば、西潟を政治活動にこれほどまでに駆り立てたのは何だったのか。ノーブレス・オブリッジとしての使命感か、それとも選挙で選ばれし選良の責任感か。国民民福の為に惜しげもなく私財を投じた西潟は、その信念を問われ、「身命何にかあらん。財産吝しむに足らず」と答えたという。政治家として、これに極まる矜持はあ

に向けられた。国や県が動かない障害者教育の為に盲啞学校を設立し運営に関わり、太平洋側に偏っていた高等教育機関の日本海側への誘致（旧制新潟高等学校）を実現する。

そして社会活動の他に、いよいよ自らの人生と政治活動を振り返る回顧録の執筆にとりかかる。几帳面でメモ魔であった西潟は、毎日の記録を克明に日記に記しており、その日記を元にした回顧録が完成する。この回顧録の完成こそが、死して後にも西潟の名を自由民権運動史の中で不朽のものにしたと言ってよい。この回顧録は「雪月花」と命名され、幕末維新の転換期、自由民権運動の展開、日本の政党創成期の状況（特に地方）を知る上で重要な資料となる。西潟の一般的知名度が低いわりに、自由民権運動や政党史の研究書で板垣退助や後藤象二郎等と伍するほどに西潟の名が登場するのは、この回顧録の存在に起因する。

【参考文献】

- 阿部恒久
『近代日本政党史論』芙蓉書房、一九九六年
- 蝶名林竹男
『西潟為藏翁の遺徳を偲ぶ』
西潟為藏翁顕彰碑建設委員会、一九六八年
- 本間恂一・溝口敏磨編
『雪月花―西潟為藏回顧録―』
野島出版社、一九七四年
- 見田宗介編
『明治の群像5自由と民権』三一書房、一九六八年
- 村瀬信一
『帝国議会―八戦前民主主義Vの57年―』
講談社、二〇一五年

【写真提供】

西潟精一

(了)

第二回 「尾崎行雄とうなぎの蒲焼」

高島 笙

(東北大学大学院文学研究科)

はじめに

「雪香さんはうなぎがお好きでしたね」。尾崎行雄記念財団事務局長の石田尊昭氏は筆者のインタビューにこう答えた。「雪香さん」とは尾崎行雄の娘であり、相馬子爵家に嫁いだ相馬雪香氏のことであることは読者の皆さんならお分かりだろう。実は、この相馬氏の好物には父である尾崎行雄が影響を与えていたのである。

このコーナーでは、尾崎行雄にまつわる様々な歴史資料をもとに、尾崎行雄について迫っていこうという趣旨の連載である。第一回目の今回は、尾崎行雄の大好物であった料理について見ていきたい。

○尾崎とうなぎに関する回想

『尾崎雪堂全集』（公論社、一九五六年）には、刊行にあたって尾崎を偲んだ多くの関係者の回想が掲載されている（『雪堂全集十二巻』）。ここでは、その中から尾崎行雄が好物にしていたうなぎの蒲焼についての記事を取り上げていく。なお、特別に典拠の表記があるものを除き、全て『雪堂全集第十二巻』からの引用であるため表記を省略している。

まずは、晩年に尾崎の付き添い主治医をしていた糸川欽也の回想である。ここでは次のように述べられている。「九十歳を過ぎたある夏のこと、栃木、群馬の各市から講演を頼まれた先生が、ウナギが大の好物と伝え聞いて、行く先ざきでどこもかしこもウナギ、ウナギというわけで、全くウナギ攻

めにあわされたものである」。このように、尾崎がうなぎ好きであるということは有名であったようで、各所で「ウナギ攻め」を受けている。尾崎は「九十歳」を超える高齢であったにもかかわらずしっかり食べたようで、その結果、「はげしい下痢」となったらしい。にもかかわらず講演を平然と続けたことから、糸川は「毅然とした気魄」を感じている（糸川欽也「主治医として」）。

次に、東京教育大学で教授を務め、戦後の憲法改正において、尾崎と共に私擬憲法案を作成した憲法学者稲田正次の回想である。昭和一六（一九四一）年に軽井沢の莫哀山荘に尾崎を訪ねた稲田は、尾崎に案内されて前田侯爵家の別荘庭園などを見学し、その後「附近の店で、先生とうなぎ飯に舌つづみを打つた」と回想している（稲田正次「翁を敬慕して」）。このように、尾崎の関係者の中には一緒にうなぎを食べた人も多かったのではないかと思われる。

さらに衝撃的であるのは、支援者の一人と思われる五明忠一郎の回想である。「先生と蒲焼」という、まさに今回のコラムそのものなタイトルが付されている。「先生は、蒲焼が大好きであった」という一文から始まるこの回想では、軽井沢の尾崎のもとに「汽車便」でうなぎの蒲焼を送るために奔走する五明が見られる。上野駅と軽井沢駅で駅長に送付を願

った後に、木挽町の竹葉（現竹葉亭本店）に翌朝十時に焼いてくれと頼むが始業前だと断れ、近くの神田川（現ぎんざ神田川）で焼いて貰った。それを鉄道便で送ったところ、尾崎に大いに喜ばれ、同じように「毎月二、三回」送ったと回顧している。なお、その際に五明が聞いた話として、尾崎が「父が明治元年に駿河台に家を持ち、最初に食べたのが神田川の蒲焼であった」と述べていたそうである（五明忠一郎「先生と蒲焼」）。

ほかにも、尾崎とうなぎに関する記述は散見されるが、最後に尾崎の娘である佐々木清香の回想を取り上げる。昭和一六年一月頃の話として、「先年までは、上京の折の昼食は、大い新橋駅を出たところの鮫蕎麦であったが、近ごろは、胃が丈夫になつたためか、いつも銀座の竹葉の鰻井に替えられた」と述べている。昭和一六年と言えば、アジア・太平洋戦争の開戦の年であり、物資統制も厳しくなっていた時期である。佐々木によれば、尾崎は「最近統制のため、以前のようない円五十銭の鰻井はなく、一円ので我まんしなければならぬ」として御不満であったとの事である（佐々木清香「父の日常生活」）。「憲政の神様」も、大好物がいつもより小さくなったことには流石に不満げな様子である。

○「尾崎行雄日記」に見るうなぎの蒲焼

尾崎行雄の日記には、うなぎを食べる場面が多く存在する。そこで、今回は昭和一六年の日記から関連する記事を書き出してみたい（「昭和一六年 当用日記」尾崎行雄記念財団所蔵、非公開）。なお、日記に記されている日以外にも、うなぎを食している日は当然にあると思われる。引用にあたっては旧漢字を常用漢字に改めたほか、日付は十を用いずに一〇のように表記した。また亀括弧「」内は筆者による。

「昭和一六年 当用日記」

四月二四日

竹葉で午食

四月三〇日

竹葉で午食シ、雑物ヲ買テ、二、二八、帰宅

五月二日（軽井沢滞在中）

午前稲田正次氏夫妻来訪、午食ヲ共ニス（先述の稲田の回想の事と思われる）

六月一〇日

寺田（健一―筆者註）氏夫妻ニ招カレ、木挽町ノ竹葉本店ニ午食

八月三〇日

品江、雪香、カガ、ライス嬢らと重箱に午食す、

九月二日

〔前欠〕重箱に午食ス、

一〇月二日

一二時、行テル、節子〔四男尾崎行輝夫妻〕二人と銀座竹葉ニ午食、

以上のように、ざっと見てきたが、多い月で週に一回以上うなぎを食べていることが分かる。昭和一六年とえば尾崎は八四歳という高齢である。ここまでうなぎを連日食べられる体力を持っていたことは驚きであるとともに、この年齢でこのような体力を持っていたからこそ彼は長生きしたと言えるのではないだろうか。

おわりに

以上、尾崎行雄がこよなく愛した食べ物であるうなぎの蒲焼について、様々な歴史資料から見てきた。娘である相馬雪香氏が、尾崎の影響でうなぎ好きになったのではないかといわれてもうなずける大好物ぶりであろう。本論を執筆して、筆者が興味を持ったのは、うなぎの価格統制の話である。

七月一七日

〔次女尾崎〕品江及ライス子イダ令嬢トナゴヤ（鰻及鳥店）に午食ス、蒲焼好味

七月二二日

早朝野村（今ハ成島）タツ子、服部文子〔尾崎の専従看護師〕、東京ヨリ来リ、三時ノ汽車ニテ帰東、共ニ鰻井ヲナゴヤ亭ニ食ス

七月二六日

宮崎氏トなごや〔ナゴヤ亭カ〕に午食ス。

八月四日

田川〔大吉郎〕氏来着、共に鰻店に午食す、

八月一〇日

石田氏ト箱重鰻店〔赤坂重箱カ〕ニ午食、

八月一三日

ナゴヤ鰻店ニ午食、〔中略〕ナゴヤ亭でも、ウナギ一円以上を許さず「重箱」「赤坂重箱」でハ二円八十銭、何ノ準拠？

八月一七日

ナゴヤ亭に午食、

八月二八日

稲田氏ト重箱に午食、

佐々木清香「父の日常生活」で竹葉亭の鰻井の価格が「二円」になり、不満げな尾崎の様子は、日記の八月一三日条の「ナゴヤ亭」の記事からも確認できる。尾崎本人はこのことを日記に記すほど不満だったのだろう。「憲政の神様」の人間味溢れる場面であり非常に興味深い。また、今回のコラムに出てきたうなぎ店は、現在でも営業している老舗がほとんどである。筆者もこのコラムを脱稿後、尾崎がこよなく愛した竹葉亭にぜひ行ってみたいと思っている。

今回は尾崎行雄の好物であったうなぎの蒲焼について取り上げてきた。次回以降も同様に歴史資料をもとにして「憲政の神様」尾崎行雄や、尾崎行雄記念財団について取り上げていきたい。

（了）

【参考文献、出典一覽】

尾崎男堂全集編纂委員会編／尾崎行雄著『尾崎男堂全集 第十二

巻』公論社、一九五六年。

国立国会図書館「稲田正次と憲法懇談会の憲法改正案」『日本国

憲法の誕生』

<https://www.ndl.go.jp/constitution/shiryo/02/055shohih.html>

（最終閲覧日：二〇一九年六月二三日）。

この他、尾崎行雄記念財団所蔵史料を用いているが、財団所蔵史料群は現在筆者により整理中のため、原則非公開とさせていただく。ご了承ください。

『尾崎行雄伝』

(沢田謙著、一九六一年)

第十三章 文相の舌禍

松方正義の後をうけて立ったのは、またも伊藤博文であった。

さすがに伊藤は、はやくから政党なしに、立憲政治が行えぬことを、よく知っていた。伊藤はまず大隈に入閣を交渉した。大隈は前内閣でこりているので、「それなら進歩党から二、三人つれて入りたい」と言った。が、それは当時の藩閥事情が許さなかった。

そこで伊藤は転じて板垣（退助）に援助を求めた。これはうまく話が進んだ。この時も自由党は相変わらず

伊藤がみずから政党組織にのりだしたのは、この時であった。

もっとも伊藤の政党計画は、この時に始まったのではない。すでに明治二十四年の冬、松方内閣が民党の猛烈な攻撃をうけていた時、自ら枢密院議長の辞職を願い出て、「どうか野に下って、政党を組織することを、お許し願いたいと思います。不敏ながら、大隈の改進黨ぐらいの同志を集めるのは、かならずしも困難ではないと信じます」と申し出たが、明治天皇はこの伊藤の辞意をお許しにならなかった。それに藩閥の元老た



文部大臣当時の尾崎。日本最初の政党内閣に、彼は初めて大臣になって入閣した。時に39歳。

ず、板垣を内務大臣に入れろと要求したが、伊藤は板垣に「私は内閣で、極力憲政の完成に努力するから、あなたは野にあって、どうか立憲政治下の政党の手本をしめしてもらいたい」と、うまいことを言って、丸めこんでしまった。

ところが総選挙がすむと、自由党がまたもしつこく、板垣の入閣をせまりだした。そしてこれがことわられると、とうとう尻をまくって、伊藤内閣に絶縁状をたたきつけ、進歩党と手をにぎって、内閣総攻撃にうつったのである。

「傭兵は頼むにたりぬ。親兵でなくてはだめだ」と、

ちが、総がかりで反対したため、この時はついにその志をとげることができなかった。

それから指おり数えて七年の後、いま自由党から絶縁状を突きつけられた伊藤が、ふたたび決心して、みずから「親兵」たる政党を組織しようと着手したのである。

ただ伊藤の困ったのは、政党組織に要する資金のことだった。すると「東洋のビル王」と呼ばれた実業家・馬越恭平が「その金はわたしに引き受けさせてください」と言って、ボンと三十万円の金を投げ出し、「それで足りなかつたら、また考えましょう」と言った。

伊藤は大喜びで、いよいよ政党組織に乗りだした。そして自由党・進歩党の連合軍が、政府の財政案をひともみに揉みつぶすと、伊藤は議会を解散すると同時に、いよいよ政党組織の報告を、内閣会議にはかった。

この時、真っ先に賛成したのは金子（堅太郎）農相であった。列席していた枢密院議長の黒田清隆までが、「伊藤さんが政党を組織なさるなら、私も老いの杖をつけて全国を遊説しましょう」と励ましたので、伊藤の

意気は大いにあがった。

こうして伊藤が着々と政党組織の準備を進めていた時、一方では、野党合同の話が進行中であった。

伊藤内閣に絶縁状をたたきつけた自由党が、進歩党に手を差しのべてくるのは、自然の勢いであった。自由党と進歩党は、多年犬と猿のように争ってきた仲であるが、おなじ提携をするなら、藩閥よりも進歩党の方が、気持ちもよいし筋も通っている。

思いは同じ進歩党だった。藩閥との提携は、すでに松隈内閣でこりこりしている。進歩党の方にも、自由党と手を握ろうとする動きが見えてきた。

この時、手につばきして立ったのが、平岡浩太郎という豪傑であった。平岡は、明治十年の西南の役で姓名をうたわれた快男子であるが、政治にはまず軍資金がいるというので、豪傑流にくわだてた九州の炭鉱事業が、日清戦争以来の好景気に乗じて、大当たりになった。たちまち巨万の富をなした。そして進歩党の代議士として、中央政界に乗り出すと、「藩閥政治を倒すには、かつて薩長が連合して幕府を倒した故智にな

らい、自由・進歩の連合でいかねばならん。しかも今の世の坂本竜馬となって、両党の橋渡しをするのは、天下に人多しといえども、不肖平岡浩太郎をおいてほかにない」という意気込みでかかったのである。

そして「おれには数十万円の金がある。これを散じて、同志を助けるのが、おれの本望だ。もしこれを全部使いき果たしても、地下無限の宝庫から掘りだすのだから、多々ますます弁ずるのみだ」と大言壮語していた。

まさかそれほどでもないかなかったが、この豪快な平岡が、身を投げ出してあっせんしたので、自由党と進歩党の合同運動はどんどん進み、六月十日、議会在解散された日には、すでに両党とも、合同の報告を承認する段取りになった。

もとより、自由党と進歩党とが離れば、藩閥がさかえ、両党が連合すれば、藩閥がおとろえることは、始めからわかりきっていた。それを、藩閥政府の離間策に乗ぜられ、あるいは黨員どうしの嫉妬心から、幾度も両党は接近せんとしながらも離れていた。

それがこんど合同して、「憲政党」という新政党を起すことになったのである。こうして六月十七日には、江東中村楼に大懇親会がもよおされ、会するもの五百名、大隈も板垣も出席して、おのおの一場の演説をこころみた。両党首の会合は、じつに明治二十五年以来のことだった。そして六月二十二日には、二千余名が新富座に集まって、はなばなしく憲政党の結党式をあげたのである。

憲政党の結成は、薩長藩閥に大きな動揺をあたえた。伊藤としても、新政党の旗揚げを急がねばならぬ。ところが六月二十四日の元老会議で、藩閥のなかに、猛然たる反対の火の手が起った。

まず火ぶたを切ったのは、山県有朋であった。山県は、伊藤とならぶ長州藩閥の巨頭であったが、典型的な保守家で、伊藤が藩閥内で進歩的な動きを見せると、いつでも盤石のような力で引きずりもどすのが山県であった。さきに大隈と伊藤とは、表面の政敵・裏面の親友だと言ったが、山県と伊藤はまさに、表面の親友・裏面の政敵であった。

山県はまず口をひらいた。「なるほど政党も、議会議

治の上では必要であろう。しかし、君は内閣総理大臣の地位にありながら、その同志を集めて一党をたてようとするのは、政略上も面白くない。まして政府は、どの政党に対しても公平でなくてはならぬのに、首相直参の与党があつては、公平を失うまいと思つても、できないことである」

これを聞くと、伊藤はすこしムツとして「わたしの決心はすでに固まっている。現職にあつての結党がいけないというなら、いさぎよく辞職して、政党を組織するのみだ」と答えた。

ところが山県は、まだ追及の手をゆるめない。「たとえ総理大臣をやめても、あなたは元老である。国家の重大問題について、陛下にお答えする地位にある元老が、政党の首領となつて、それでも一党一派にかたよらないお答えをすることができませんか」

伊藤はいよいよ怒った。「総理大臣としてはいかに辞職しても、元老だからいかにということなら、わたしは絶対に、政党を組織してはいかにということになる。それならば、わたしは一切の勲爵を拝辞し、一個の平

民となって、結党するのみである。一平民として結党するなら、元老会議にご相談する必要もないわけだ」とまで言い切った。

ところが山県は、なおもしつこく「それほどまでの決心なら、また何をかいわんやです。が、友人としてなお一言いわせていただきたい」と、伊藤をにらみつけた。「あなたは憲法取調べを終えて帰朝なさった時、ドイツの政治についてお話しになり、国務大臣は、天皇に対してのみ責任をもつものであると高唱し、わが国体において、ならうべきはひとりドイツであるのみだと論ぜられた。帝国憲法もその主義によってでき、議会にたいしても、その趣旨をもって臨んできたのである。しかるにあなたは、なぜみずから政党组織して、わが国体を破壊し、政党内閣のもとを開いて、わが国を民主政治におとし入れようとなさるのか。わたしは友人の立場から、ぜひ考え直していただきたいと切望する」

伊藤はなお屈せず、山県と言い争ったが、とてもだめだと見ると、いきなり室をとり出してしまった。その間に尾崎行雄が入閣した。

自由派から三人、進歩派から三人というのだから、ちよつと見ると公平のようだが、ほかに大隈が、首相にして外相をかねているから、大臣の椅子からいうと五対三になる。自由派の不平はそこにあった。

しかし同じ大臣といっても、自由派には内務・大蔵・逓信という、もつとも重要な椅子をゆずり、進歩派には、世に伴食大臣といわれる、比較的軽い三相をとったのだからというので、自由派をなだめた。

これで七省の大臣はできたが、陸軍と海軍とは困った。当時の制度では、軍部大臣は、薩長に人を求めるほか、道がなかったのである。これに乗じて、藩閥のうちには、政党内閣を流産に終わらせようと企んだものもあったが、明治天皇が「陸海の二大臣は、朕みずから任命して、内閣の組織を助けよう」と仰せられたので、結局は前内閣の通り、海相に西郷従道、陸相に桂太郎が留任することになったが、この内閣のいちばんの危険は、外よりも内にあった。問題は、いかにして藩閥と戦うかということよりも、いかにして内輪から火を出さぬように、用心

して翌日、ただちに参内して、内閣総辞職するとともに、勲位と爵位を返上することのお許しを乞うた。しかし天皇は勲爵の返上をお許しにならなかった。

こうして伊藤の新政組織は、藩閥の妨害にあつて、ついに実現されなかった。が、伊藤はこれで断念したのではない。まもなく別の機会に、この問題は再燃するのである。

政党组織に失敗した伊藤は、すぐに大隈と板垣とを、後継内閣に推薦して、身をひいた。まことに伊藤らしい、機敏なやり口であった。憲政党が成立したばかりで、まだ結束がかたまらないうちに、内閣をあげ渡して、内閣が自然にくずれるのを待とうというのであった。

そのことは、大隈も板垣もよくわかつていた。だが思えば、日本の歴史上はじめての政党内閣ができる機会がおとずれたのだ。はじめは二人ともためらったが、勇を鼓して、内閣を引き受けることにした。

首相は大隈で、外相をかね、自由派からは、内相に板垣退助、蔵相に松田正久、逓相に林有造がはいった。進歩派からは、法相に大東義徹、農相に大石正巳、文相に尾崎行雄が入閣した。

自由派から三人、進歩派から三人というのだから、ちよつと見ると公平のようだが、ほかに大隈が、首相にして外相をかねているから、大臣の椅子からいうと五対三になる。自由派の不平はそこにあった。

しかし同じ大臣といっても、自由派には内務・大蔵・逓信という、もつとも重要な椅子をゆずり、進歩派には、世に伴食大臣といわれる、比較的軽い三相をとったのだからというので、自由派をなだめた。

これで七省の大臣はできたが、陸軍と海軍とは困った。当時の制度では、軍部大臣は、薩長に人を求めるほか、道がなかったのである。これに乗じて、藩閥のうちには、政党内閣を流産に終わらせようと企んだものもあったが、明治天皇が「陸海の二大臣は、朕みずから任命して、内閣の組織を助けよう」と仰せられたので、結局は前内閣の通り、海相に西郷従道、陸相に桂太郎が留任することになったが、この内閣のいちばんの危険は、外よりも内にあった。問題は、いかにして藩閥と戦うかということよりも、いかにして内輪から火を出さぬように、用心

そのころの尾崎は、相変わらずの貧乏ぐらだった。

あまり貧乏の評判が高いので、ある日、保険会社の勧誘員が来て、「あなたは貧乏だから、死ぬと、家族が葬式を出すのに困るでしょう。今のうちに、保険に入っておきなさい」とすすめたほどだった。

彼は失礼なことを言う奴だと思ったが、からかい半分「その心配は無用だ。おれは死ぬねば、きつと国葬になるから、葬式の費用はいらん」と言っただけで追い返した。それが評判になって「尾崎国葬」などと、からかわれるようになったが、こんど憲政党内閣の文相になると、「尾崎さん、いよいよ国葬の時期が近づきましたね。おめでとう」とお祝いを言われたのには、あきれて返事もできなかつた。そう急に、国葬にされては、たまつたものではない。

憲政党内閣ができて間もなく、総選挙が行われた。この選挙で、憲政党は三百の議席のうち、二百四十三を得て、圧倒的な大勝利を博した。が、この時、内部の争いはだんだん悪化して、まったく手のつけられぬものになっていた。

元来、憲政党は、藩閥政治と戦うために生まれたもろい。自由党の中にも、土佐派と九州派、さらには関東派と三派鼎立の形であった。ところが土佐派からは板垣、林の二人、九州派からは松田が入閣したのに、関東派からは一人の大臣も出してない。そこで関東派は、外相の椅子を星に与えるべきだと、板垣に交渉すると同時に、星に急電を打って帰朝をうながしたのだった。星は、自分が帰れば、外務大臣になるものだと自分でも決めていた。だから帰朝命令も出ないのに「おれは帰朝して外務大臣になるんだ」と、さつさとアメリカから引き上げてきたのである。外務省ではびっくりして「帰朝を許さず」という電報を打ったのだが、星はわざとその封も開かず、ポケットに入れたまま、船に乗ってしまった。

そして横浜に出迎えに来ている外務省の役人の顔を見ると、「電報はサンフランシスコで乗船の間際に受けとつたが、まだ見ていない」と言っただけで、外務省員の見ている前で封を開き「帰朝を許さずと言つたって、もう帰朝してしまつたのだから、今さら引き返すわけに

ので、主義政策が完全に一致したからではないから、両派の間で意見が分かれるのは、やむをえぬことだった。自由派は鉄道の国有を主張したが、進歩派は反対だった。逆に進歩派は警視庁の廃止をと考えたが、自由派は不賛成だった。文官任用令についても、進歩派の制限任用制に対して、自由派は自由任用制を主張するというわけで、両派はたえず争っていた。

これらの内輪喧嘩は、つつぬけに藩閥に伝えられ、その争いの火に油がそそがれた。西郷海相と桂陸相とは、藩閥のかくし目付のようなものだったが、西郷はどちらかというところ進歩派に近く、桂は自由派に接近する傾きがあつた。さすがに西郷は、積極的に動くようなことはなかつたが、桂はだんだん露骨に、この内輪喧嘩の火をおおって、内閣を中から転覆するようなことを始めた。

思えば憲政党内閣は内部に、大きな獅子身中の虫をやしなつていたのである。そこに、公使としてアメリカに渡つていた星亨がもどつて来た。それにはわけがある。

もともと内閣における大臣の振り合いが、自由派に

もいくまい」と、空うそぶいていた。

そこで尾崎は、さつそく大隈に会つて言った。「星君を内閣に入れたら大変ですぞ。あれは喧嘩の名人で、内に入れても喧嘩するし、外においても喧嘩する。しかしどちらがうるさいかといえば、閣内で喧嘩をやることです。これは内閣の命とりになりますぞ」

だが大隈は、いつもの樂觀主義で「なあに内に入れてとけば、そう喧嘩をするもんじゃないさ」と、しきりに尾崎をなだめた。それでも尾崎は、しつこく反対する、これは自分が外相になりたいからだど勘ぐつたのか、「ではいっせ、君が外務大臣にならぬか」とまで言った。

尾崎は無論そんなつもりはないから、それを辞退し、そのかわり、星の入閣だけはぜひ思いとどまるようにすすめてわかれた。このように、星の入閣については、進歩派からの反対がかなり強かつたが、一方、自由派内にも反対者があつて、結局星の入閣は実現しなかつた。すると星は「よし、おれを入れないような内閣なら、たたきつぶしてしまえ」と、内閣をこわす方の運動にかかつた。

さなきだに、内輪喧嘩で屋台骨がぐらついているところに、星という大きな破壊力が加わったのだから、たまらない。そこに不幸にも、尾崎のいわゆる「共和演説問題」が起こった。

事のおこりは、尾崎は、帝国教育会主催の小学校教員講習会に招かれて、そこでやった一場の演説であった。

かねて日本の社会が、物質万能に走りすぎているのを憂っていた尾崎は、その一例として、アメリカを拝金宗の本場のように思っているが、アメリカでは、金のあるために、大統領になったものは一人もいない。歴代の大統領は、むしろ貧乏人の方が多いと述べたのち、「日本では、共和政治を行う気遣いはない。たとえ千万年をへても、共和政治を行うことはないが、説明の便宜上、かりに日本が、共和国になったと仮定せよ。おそらく三井、三菱が、大統領候補になるだろう」という意味を説いた。

ところがそれをこじつけて、藩閥の御用新聞の東京日日新聞が、尾崎を共和主義者だと攻撃したため、藩閥はもとより、自由派までが、尾崎排撃の火の手をあ

だいに攻撃の火の手が静まった。

ところが運わるく、そこにまた板垣内相の「仏敵問題」が起こった。これまで刑務所の教誨師は、仏教の僧侶だけであったが、板垣内相の時になって、キリスト教の牧師も、教誨師に採用することにした。すると僧侶たちが怒って「仏敵板垣」という檄文をまき散らすものがあり、神経質な板垣は、よほど感情が高ぶったらしい。

その虚に乗じて、一部の策士が、「この際、仏敵問題で争っては不利におちいるばかりです。むしろ尾崎の共和演説問題をとらえて、共和主義者などとは同じ内閣に立つことはできぬという立場をとりなさい。そうすれば、仏敵問題は自然に消えてしまいます」と、入

れ知恵するものがあつた。

困っているところだから、板垣は、ついその手にのつてしまったのである。

ある日、会議が終わると、尾崎は板垣といっしょに帰ろうと待っていた。普通なら、脚の不自由な大隈の世話をしなければならぬのだが、うっかりあの大隈の

げたのである。

むろん、まるで根拠のない非難であるが、政敵が内閣を倒す道具につかう異常、問題をはっきりさせねばならぬと思ったので、尾崎は「閣僚がけしからぬ演説をしたという非難がある以上、総理大臣としては、公然吏員をつかわして、事実を調べさせるべきです。それでもし、本当に不都合なことを言ったとあらば、当然処分すべきだと思います」と、大隈首相をうながした。

幸いにもその演説は、速記がとつてあつたので、尾崎は金庫へ嚴重に鍵をかけ、速記録を帝国教育会に保管させておいた。さつそく内閣書記官が出向いて調べてみると、世間で非難しているような言葉はひとつもなく、むしろ道義高揚の演説であることがはっきりした。

すると反対者は「尾崎は速記録を書きかえた」と言いだした。こうなると、もう尾崎の勝ちである。演説の内容が悪いならともかく、速記録を書きかえたと言われては男子の面目がたたぬから、尾崎は反対者をはげしく追撃した。すると、元来が根も葉もないことだから、反対者がいくら騒いでも、問題にならない。し

巨体のつかい棒になったら、小柄な尾崎は押しつぶされてしまうので、大隈のほうは西郷海相にまかせ、彼は仲のいい板垣と、話しながら帰ることにしていた。

ところがその日にかぎって、板垣は帰ろうと言わな

い。みんな帰つたのに、板垣だけはなんだか落ち着かない様子で、閣議室を行きつもどりつしていた。尾崎が、「もう帰ろうじゃありませんか」と誘うと、「いや、これから参内せねばならん」と答えた。

尾崎は変だなあと思った。板垣は、あれだけの元勳のくせに、ひとりで明治天皇の前に出るのは、気おくれがするものと見えて、参内する時は、いつでも誰かさそうのに、その日にかぎって、ひとりで参内するつもりらしい。

板垣が不安そうな顔をしていたのも無理はない。その日、彼は参内して、「尾崎とは両立できない」と、上奏したのであつた。

そんな事とはつゆ知らず、尾崎が官邸にもどっていると、突然、侍従職幹事の岩倉具定が訪ねてきて、簡単に板垣上奏のてんまつを述べたのち、「先輩たる板垣

が、両立できぬというからは、事のいかんを問わず、後輩たる尾崎がしりぞいて、内閣を全うすべきである」という、天皇のご沙汰を伝えたのだった。

そこで尾崎は、「ご沙汰とあらば、いつでも辞表はさしあげますが、もし共和演説の責めを負えというのなら、わたしは辞職するよりも、天下後世への見せしめに、むしろ国法によって、処分されることを希望します」と答えた。すると岩倉が「いや、決して共和演説のためではない。ただ先輩の板垣が、両立しがたいと上奏したためである」と、くりかえし明言したので、尾崎は辞表を出すことにした。

しかしいくら考えても、これは尾崎個人のことは思えぬので、さっそく大隈首相を訪ねて、「政敵がわたしを攻撃するのは、将を倒さんと欲して、まず馬を射るの戦法です。目指すはわたしではなくて、あなたと思うから、よくお考えを願います」と言ったが、あくまで樂觀的な大隈は、「いや、君さえおだやかに辞職してくれば、あとは大丈夫だ」と、平気な顔をしていた。首相がそういう方には仕方がないので、尾崎は後任

「不肖重信、内閣総理の重任にあるからには、大臣の指名を他にまかせることはできません。職権をもって、みずから文部大臣の後任をえらび、上奏します」

そう言って、さつと席を立つと、すぐに参内して、犬養毅を文相に推薦した。火ぶたはついに切られたのだ。

こうして文相の椅子争いにやぶれた自由派の領袖たちが、額をつき寄せて相談していると、そこに悠然と二十六貫の巨体を現したのは、星亨だった。とたんに自由派の指揮権は、星ににぎられた。

星はまず、憲政党の解党を提議し、進歩派の総務委員がそれをはねつけると、星はいよいよその本領を発揮して、いかにも星らしい強引な作戦に出た。すなわちまず、憲政党の名で、臨時協議会をひらき、進歩派の協議員の欠席を勿怪の幸いに、ただちに憲政党の解党を決議すると同時に、すぐ協議会を党大会に切りかえて、たちまち憲政党の解党を確定してしまった。ついで、新たに憲政党を組織する件を議題にかけ、一瀉千里の勢いで、綱領や党則などを可決してしまったのである。

に犬養毅をすすめて、辞表をわたした。

はたして尾崎の心配した通り、後任文相をめぐる、内閣に激論が起こった。自由派では、閣内のつり合い上げひこんどは自分の方から出してもらいたいと、星亨と江原素六を候補者にあげた。ところが進歩派では、自派の文相のあとがまだから、やはり自派から出さねばならぬといって譲らなかつた。

もめにもめた挙句、ではいっそ党外に人を求めようと、自由派は青木周蔵を推したが、これは自由派の臭味をおびているといって進歩派が反対し、進歩派のもちだした近衛篤磨は、進歩派の色が濃すぎるといって、自由派が承知しなかつた。

こうして後任問題は、翌日の閣議に持ちこされたが、どうしても決まらない。ついに百計つきで、「仕方がないから、いっその人選は、党外の西郷海相と、桂陸相にまかせようか」という説まで出た。すると、大隈がサツと顔色をかえた。大隈が怒るのには無理もない。この二人は、藩閥のかくし目付として、内閣に留任している人たちなのだ。

疾風迅雷とはこのことで、まったく目をおおう暇もない。星ならでは、水際立った離れ業であった。進歩党派はもちろん、この乱暴な憲政党の横領に抗議したが、すでに芝山内（現在の増上寺付近）の憲政党本部は、自由派の壮士が、撃剣用の面や籠手に身をかため、手に手に竹刀や木刀をひっさげて守っているため、進歩派は近寄ることもできない。

それでも進歩派は、星の陰謀による党解散を否認して、自分の方も相変わらず憲政党を名乗ったので一時は、ふたつの憲政党が並び立つの奇観を呈していた。が、この進歩派の憲政党は、内務大臣板垣退助の名で禁止命令をくらったので、やむなく憲政本党を名のり、自由派の憲政党と対立することになった。

こうしてやるだけのことをやってしまうと、自由派の板垣内相と松田蔵相、そして林通相の三大臣はそろって辞表を出し、さつさと内閣を出てしまった。

せっかく誕生した日本最初の政党内閣は、こうしてわずか半年で、あつけない最期をとげたのである。

（次号・第十四章に続く）

アフリカ—鉱物資源の収奪と環境破壊に苦しむ地元住民

一〇年以上前、トビアス・ムクワダさんは、中国からダイヤモンドを求めてきた掘削業者に自宅を跡形もなく取り壊されてしまった。今年七四歳になるムクワダさんは、今なお、あの時の中国人商人らが自分たちのことを覚えていて、いつかまともな家を提供してくれることを夢見ながら、自分たちで建てた粗末な藁葺屋根の掘立小屋に家族と住んでいる。

しかし、貧困にあえぐムクワダさんと家族にとって、それは甘い夢なのかもしれない。ジンバブエのロバート・ムガベ元大統領は二〇一六年、中国のダイヤモンド採掘業者に対して、東部の高地から退去するよう命じた。「中

国人はダイヤモンドを掘削するために家を壊すと言って、私たちを追い出しました。新しい家を建ててくれるという約束でしたが、ほんの一部の人しかそうしてもらっていません。彼らは私たちの土地にあるダイヤモンドで手っ取り早く儲けた一方で、私たちは貧困のどん底に落とされたのです。」と、ムクワダさんはIDNの取材に対して語った。

中国系企業「アンジン」は二〇一六年二月、ムバダ・ダイヤモンド社とともにジンバブエ政府からの退去処分を受けた。特別免許が失効しているということが理由だった。それに先立って、当時のムガベ大統領は、ダイヤ

モンドの大規模な流出・密輸に関わっていると、両企業を非難していた。

エマーソン・ムナンガグワ新大統領に政権交代した現在でも、ジンバブエの豊かなダイヤモンド鉱床を巡る問題は収まる気配がない。今年になって、別の中国系採掘業者への門戸が再び開かれたからだ。

海外企業によるジンバブエ産ダイヤモンドの流出により、数十億米ドルもの歳入が失われた。ムガベ元大統領は、九三歳を祝うテレビインタビュー（二〇一六年）で、同国はダイヤモンド採掘の収入一五〇億ドルを失ったと語った。

こうした略奪が横行する中、ムクワダさんのような多くのジンバブエ国民は、豊かな宝石資源が埋もれた土地に住んでいながら、貧困にあえいでいる。しかし、アフリカ大陸の各地で海外企業が鉱物資源を奪う中で貧困に苦しんでいるのは、ムクワダさんのようなジンバブエ国民だけではない。

ザンビアでは、アニル・アガルワル氏のような銅採掘王（英国の資源大手「ベダント・リソーシズ」社を保有するインドの億万長者）が多額の徴税逃れをしていると政府から非難されている。ザンビアのドラ・シリヤ情報

相は五月、首都ルサカで記者団に対して「同企業には三〇億一〇〇〇万クワチャ（≒約二五億八〇〇〇万円）の税金支払い義務がある。」と語った。

しかし、南に国境を接するジンバブエと同じく、約一八〇〇万人の人口を抱えるザンビアも、深刻な貧困問題と闘っている。世界銀行によると、ザンビア国民の貧困率は六〇％で、そのうち、一日一・二五ドル以下で生活している最貧困層は四二％にもなる。

ザンビアは鉱物資源が豊かであり、特に銅は国の外貨収入の七五％以上を占め、二〇一七年には六一億ドルだった。同国はアフリカで第二の銅生産国であり、米国の「二〇一五年地質調査」によると、世界第八位の埋蔵量を誇る。

しかし、ザンビアに対する海外投資家と包括的大採掘プロジェクトは、貧困線以下で暮らす人々の生活にほとんど効果をもたらさなかった。ザンビアの経済学者らは、長年にわたって採掘してきた地元の人々に還元しようとはしない海外企業に事業を斡旋してきた政府を非難している。

「腐敗した政府閣僚らは、海外企業に採掘を許可する前に、数百万ドルとは言わないまでも、数万ドル規模の

賄賂を手にかけています。一方で、鉱物を簞奪された貧しい地域コミュニティには何の恩恵も与えられませんが」と、ルサカの民間エコノミスト、デイビッド・ムワンサ氏は語った。

長年にわたり貧困に打ちひしがれてきたモザンビークのようなアフリカの国々で、海外採掘企業が来てから事態が大きく好転した国はほとんどない。最近、モザンビークのある高官が、一部の海外採掘企業に対して、貧困を悪化させ環境破壊を進めているとして、国内からの退去処分を課した。

モザンビーク・マニカ州のロドリゲス・アルベルト州知事は五月、中国と南アフリカのコング探掘企業の営業停止処分を発表して、「私たちは、こうした会社に対して容赦はしません。もし彼らが対応しないなら会社を閉鎖するのみです。我が国の資源が、呪い（＝長期にわたる貧困をもたらす原因）になることなど受け入れられませんが」と語った。

世界銀行によれば、モザンビークの人口約三二〇〇万人のおよそ半数が貧困層であるという。

昨年発表された世界銀行の報告書「世界の富の推移二〇一八―持続可能な未来をつくる」は、海外企業の野

二〇〇二年にかけて「国家採掘部門の少なくとも五〇億ドルの資産の所有権を民間企業に移したが、国庫には何の補償もなかった」という。

トレサー・モナイド氏のようなコング民主共和国の開発問題専門家からすると、人口の多いこの国の鉱物資源は、多くのコング国民にとって、「恵み」というよりもむしろ「呪い」といった存在になっている。「政治家は数百万ドル規模の賄賂を手にし、めったに税金など払うことのない海外採掘企業に豊かな天然資源を二束三文で売り払ってしまいました。この国の状況は病的だ。」とキンシャサを拠点にする独立系開発専門家モナイド氏は語った。

『ファイナンシャル・タイムズ』の調査報道記者トム・バーギス氏によれば、「コング民主共和国の失われつつある富、荒れ狂う暴力と最悪の貧困という組み合わせは、偶然に起こったものではなく、アフリカ全体を襲っている大惨事の一つのパターンとなっている。」

貧困問題の解決を目指すイギリスのNGO「欠乏との闘い」が二〇一六年に出した報告書『新たな植民地主義―アフリカのエネルギー・鉱物資源にたかるイギリス』によれば、アフリカ大陸は、天然資源、とりわけ戦略的

放図な金属・石油・ガスの採掘によって、いかにアフリカがより貧しくなっているかについて明らかにした。多国籍企業によってアフリカの天然資源が大量に毀損していることが示されたのである。

報告書によれば、海外からの直接投資誘致を狙ったアフリカの短絡的な「開発政策」が、非生産的なものとなつてしまったという。とりわけ、資源が豊富な国にとっては、天然資源の毀損が他の投資によって埋め合わせられていることはほとんどない。

海外採掘企業の餌食と化している人口約八七〇〇万人のコング民主共和国に目を向けると、カタンガ州がダイヤモンドや金、タンタルといった希少鉱物を含む豊富な天然資源を有している。

カタンガ州では当時のローラン・デジレ・カビラ大統領と、後にはその息子のジョセフが、国際的採掘企業に採掘の許可を与えたことから、二一世紀に入るところから採掘ブームが始まった。その後、年を重ねるにつれて、この仕組みの下でコング民主共和国のエリート層と採掘企業が莫大な利益を享受したが、貧困に喘ぐ住民には何も与えられなかった。

国連の調査によると、カビラ政権は一九九九年から

なエネルギー・鉱物資源を略奪しようとする壊滅的で植民地主義的な侵略に新たに直面しているという。

報告書で挙げられた事例の一つは、モロッコが占領している西サハラของガスと石油を狙う動きである。モロッコは一九七五年以来、西サハラの大部分を占領している。人口の大部分は武力によって追放され、その大半にあたる一六万五〇〇〇人が依然としてアルジェリアの砂漠地の難民キャンプで生活している。

西サハラの場合は、多くの人が自分の国で不法占拠者となる状況に追い込まれた典型だ。これは、ジンバブエでムクワダさんのような多くの貧しいアフリカ人を、手段を選ばない方法で、土地から追い出した海外採掘企業を引き寄せた「鉱物資源の呪い」である。

「私たちには、鉱物資源ではなく貧困しかありません。」と、ムクワダさんは語った。

(二〇一九年六月記)

【ハラレIDN＝ジョフリー・モヨ】

財団だより

◇三月二二日(金)、当財団後援、NPO法人一冊の会主催による「講演と音楽の夕べ」が憲政記念館講堂にて開催されました。収益は被災地復興支援活動資金、また二〇二〇年度に日本で開催されるFAWA・アジア太平洋女性連盟国際会議(二冊の会が日本代表団を務める)の準備金等に充てられました。

◇三月二五日(月)、当財団・GII共催講演会を憲政記念館にて開催。講師は、GII所長の吉川圭一氏。テーマは「サイコ型テロの処方箋」。

◇四月一三日(土)、罌堂塾設立二〇周年・罌堂没後六五周年記念講演会を憲政記念館にて開催。講師は、衆議院議員の石破茂氏。テーマは「日本の進むべき道」。

◇五月二二日(水)、当財団・GII共催講演会を憲政記念館にて開催。講師は、日本国際問題研究所客員研究員の田村重信氏。テーマは「憲法と自衛隊そして危機管理」。

◇五月二五日(土)、第二一期罌堂塾入塾式兼第一回講義を憲政記念館にて開催しました。今期は二一名が入塾。第一回講義は、石田尊昭・当財団理事兼事務局長による「尾崎行雄と相馬雪香―その信念と生き方」。

◇五月三二日(金)、当財団定例評議員会を開催し、二〇一八年度決算報告ならびに二〇一九年度事業計画・予算が承認されました。

◇六月八日(土)、三重県伊勢市のNPO法人罌堂香風の「設立二五周年・感謝の集い」が開催され、当財団からは石田尊昭理事が出席し挨拶をしました。

◇六月一五日(土)、「罌堂塾」第二回講義を開催。講師は、高橋大輔・当財団研究員兼IT統括ディレクター。テーマは「憲政史から考える、日本の未来」。

◇六月二二日(土)、「罌堂塾」第三回講義を開催。講師は、ビデオジャーナリストの神保哲生氏。テーマは「日本のメディア問題」。

世界と議会(第五八三号)

定価五百円

発行所 一般財団法人 尾崎行雄記念財団

〒100-0001 東京都千代田区永田町1-1-1 憲政記念館内

電話 〇三(三五八一) 一七七八

ファックス 〇三(三五八一) 一八五六

ホームページ <http://www.ozakiyukio.jp>

メール info@ozakiyukio.jp

世界と議会

World
and
Parliament

一般財団法人
尾崎行雄記念財団
www.ozakiyukio.jp

2019 夏号
OZAKI
YUKIO

特集：日本の進むべき道

峯堂塾設立二〇周年・峯堂没後六五周年

記念講演「日本の進むべき道」／石破 茂

特別論文

自由民権政治家・西潟為蔵の生涯—政治家の矜持／弥久保 宏

歴史資料から見た尾崎行雄

第一回「尾崎行雄とうなぎの蒲焼」／高島 笙

INPS JAPAN

アフリカ— 鉱物資源の収奪と環境破壊に苦しむ地元住民

連載「尾崎行雄伝」

第十三章 文相の舌禍

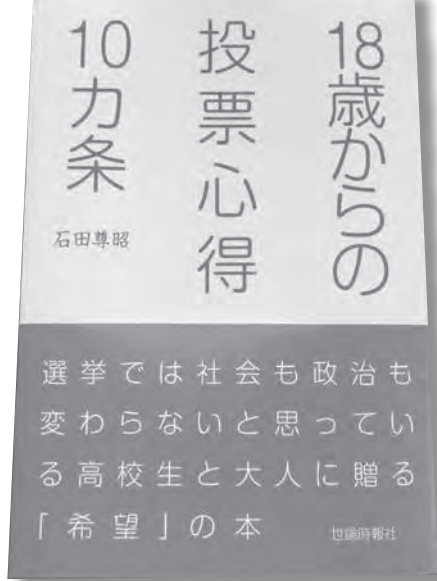


18歳と19歳の男女240万人が投票します。

第1条 何よりもまず、自分はいかなる政治を希望するかという自分の意思を、はっきりと決めてかかることが大切だ。選挙は、国民の意思を国政に反映させるために行われる。つまり、反映する本体がしっかりしていなければならない。有権者自身に政治的意思——どのような政治、どのような国・社会を実現したいと考えるのか——がなければ、いくら投票しても意味がない。

●主な目次／民主主義と“格闘”しよう／選挙・政党・議会／民主主義と立憲主義／投票の心得10カ条／議員の資格10カ条／「考える力」とメディア・リテラシー他

全国の高校から注文が相次いでいます。



石田尊昭 著

一般財団法人 尾崎行雄記念財団
理事・事務局長

本体価格：1,200円+税 (送料無料)
本書のお求めは最寄りの書店、もしくは世論時報社に
直接お申し込みください。短日でお届けいたします。



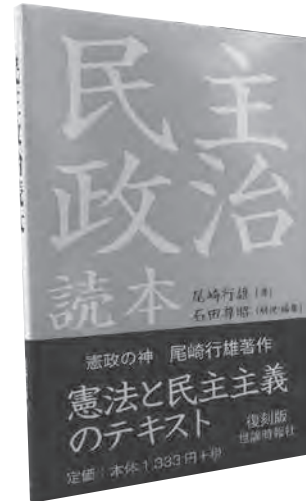
高校生と指導の教員に
未来をつくるため知ってほしい
「投票」することで変化すること
が沢山あることを——。

好評発売中

世論時報社
書籍案内

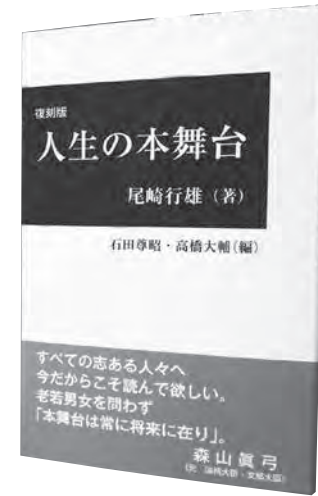
今蘇る

憲政の神 尾崎行雄著作



尾崎行雄〔著〕
石田尊昭〔解説・編集〕
定価：本体1,333円+税

立憲主義と民主主義に対する国民の理解と自覚を促すために書かれたのが、『民主政治読本』である。日本国憲法が施行された年に、いわば「憲法と民主主義のテキスト」として書かれた同書の内容は極めて挑発的である。すべての志ある人に読んでほしい。



尾崎行雄〔著〕
石田尊昭・高橋大輔〔編集〕
定価：本体861円+税

自由民権運動の60年を、私利私欲にとらわれず、社会のため、国のため、ひいては世界のために何をすべきかを考え、行動した。自らの利害得失ではなく、正邪善悪を基準に行動してきた尾崎だからこそ、「人生の本舞台は常に将来に在り」という力強い言葉が宿った。

新刊・好評発売

●本書の申し込み方法

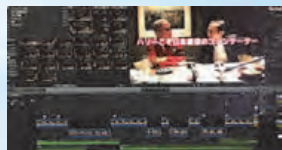
最寄りの書店もしくは当社へ。
当社にお申し込み下さいますと、短日(送料無料で)お届けいたします。

株式会社世論時報社 seron2009@seronjihou.co.jp



今や必要不可欠となった、インターネット時代の政治活動戦略。ホームページにSNS等、もはやネット抜き選挙戦は考えられません。私たちVoiceJapanは、政治活動に最適化されたツール「ネット参謀」の導入から最新の映像コンテンツ制作までをワンストップで提供いたします。

政治はもっとインターネットを活用できる。それを証明するのは、私たちと他の誰でもない「あなた」です。



戦略コンサルティング・サイト制作および運営・映像コンテンツ編集配信

株式会社VoiceJapan —政治と市民をインターネットでつなぐ—

<https://voicejapan.jp/>